

第 1 回市史講座ミニレポート：平成 30 年 4 月 14 日（土）



「松江市周辺の自然災害史」 横田修一郎先生（島根大学名誉教授）

今回は島根大学名誉教授の横田修一郎先生に「松江市周辺の自然災害史」と題し、ご講演いただきました。4月9日（月）午前1時32分頃、島根県大田市で震度5強を観測する大きな地震が発生し、怪我をされた方や建物損壊等、多くの被害が発生しました。松江市内でも震度4を観測し、自然災害の脅威を間近に感じたばかりのタイミングでのお話となりました。

まず、先生は、自然災害を考える際、「自然ハザードの発生要因」と「社会的要素が関与した自然災害の発生要因」を分けて理解することが大切と話されました。たとえば、斜面崩壊は自然ハザードであり、災害ではありません。斜面崩壊を起こす影響域に住居等の位置が重なった場合、「家が壊れた」等、財産の損失や生命の危機、つまり自然災害が発生します。時代とともに人々の活動範囲や居住域と自然ハザードの影響範囲の重なりが大きくなり、自然災害の発生頻度が増加、被害規模も拡大してきたと説明されました。

そして、松江市周辺の地域が経験してきた自然災害について、浸水、地震、津波、斜面災害に分けて説明をしていただきました。

洪水による浸水災害についてみると、宍道湖周辺では斐伊川の洪水による浸水被害が多く発生してきました。江戸時代に行われた佐陀川や天神川の開削はこうした浸水被害に対応したものでしたが、江戸から明治時代にかけても数年に一度は氾濫し、現代では昭和47年（1972）、平成18

年（2006）に大きな浸水被害が発生しています。

地震については、記録が少なく、かつ被害状況から地震の発生した位置・規模等を推測するしかないため、実態をつかむのは大変難しいということです。

松江市付近に影響した地震は2種類あります。まず一つは、四国～紀伊半島沖で周期的に発生する巨大な南海地震です。M8.4と想定される安政元年（1854）の安政南海地震では、現在の松江市内で家屋の倒壊、火災が発生、周辺では地盤亀裂や噴砂が発生したことが記録されています。また、昭和21年（1946）の昭和南海地震では、朝酌川河口で農地の沈下・浸水が発生しました。この地震は、震央は離れているため、大規模な災害発生には至っていないのが特徴です。

もう一つが松江市の近傍で発生するやや小規模な直下型地震です。古くは元慶4年（880）の出雲地震により、国府で寺社の倒壊があったことが記録されています。そのほか、明治5年（1872）の浜田地震や昭和18年（1943）の鳥取地震などの例がありますが、平成12年（2000）の鳥取西部地震が記憶に新しいところです。この鳥取西部地震では松江市で震度5強を観測しており、記録の上からは歴史上最大ということです。いずれもそれぞれの震央周辺では大きな災害が発生しています。

津波については、潮位が突然高くなっても地震による揺れを感じなければ波浪と考えられてしまうことも多く、明治以前の記録は極めて少ないそうです。ただ、天保4年（1833）に島根半島や境港で津波が記録されており、これは山形沖の地震によるものと考えられています。また、島根県の津波には、隠岐諸島周辺の海底地形の高まりが関与していると考えられるそうです。

記録されることが少ないものの、頻発してきた災害としては斜面災害が挙げられます。松江市を含む島根県では頻繁に地すべりが発生しているのですが、局所的であるためなかなか記録に残らないのだそうです。しかし、現在と同様に歴史的にも数多く発生してきたことが想像できます。

ここまで松江市周辺で発生してきた災害の種類ごとにご説明いただきましたが、最後に将来に向けて自然災害の軽減を考えるためにはどうすべきかを話していただきました。

冒頭でもあったように、自然ハザードの発生と、社会的要素が関与した自然災害の発生とは分けて考えなければなりません。自然ハザードのうち、たとえば地震動や火山噴火等は、発生そのものをなくす・減らすことは不可能ですが、小規模な斜面崩壊に対しては斜面の防止工などが効果を発揮します。その一方で、自然ハザードには手を付けず、社会的要素を工夫する方法としては、建物等の強度を高める、移転・避難などによって自然ハザードと居住・活動域等との重なりを避けることなどがあげられます。

これらいずれの方法にも、過去の歴史史料と経験が役に立ち、どれが有効であるかはハザードの種類と地域事情によって異なり、経済性も考慮しながらバランスの良い組み合わせを求めていく必要があるとお話されました。過去の災害の歴史に学び、自分たちの住む地域にどんな自然ハザードと自然災害発生の可能性があるのかをよく知ることが、将来の災害を軽減することにつながるとわかりました。